

EWSS（Early Warning Scoring System）として「HOPE LifeMark-RRS支援ソリューション」を活用した自動入力と情報共有により安心・安全な療養環境を構築

患者さんの心停止などの急変を未然に防ぐためには、容態が悪化する前に迅速に介入することが極めて重要です。近年、急性期病院では、患者さんの急変兆候を早期に察知する専門チームであるRapid Response System（RRS：院内迅速対応システム）の導入が進んでいます。RRSチームが迅速に対応することで重症化や心停止を防ぎ、患者さんの安全確保や予後改善が期待されています。さらに、2022年度診療報酬改定において「急性期充実体制加算」の算定要件にRRSの整備が盛り込まれたことを受け、全国の急性期病院で普及が加速しています。

岐阜市民病院様では、2021年度にRRS委員会を設立し、翌年度にはRRSチームであるMET（Medical Emergency Team）を立ち上げました。同時に、富士通Japanの開発チームと協働し、バイタルサインを点数化するRRS支援ソリューションの開発に着手しました。2023年度からは、重症部門病棟と小児科病棟を除く全病棟で運用を開始し、急変や重症化予防の精度向上に取り組んでいます。

お客様について

岐阜市民病院は、岐阜医療圏の中核病院として地域医療に大きく貢献してきた。地域医療支援病院、地域災害拠点病院、地域がん診療連携拠点病院、がんゲノム医療連携病院などの指定を受けており、救急告示病院としては年間約6,000台の救急車を受け入れている。また、高度急性期医療を担い、手術支援ロボットをはじめとする最新医療機器を整備している。さらに、消化器病センター、循環器病センター、心不全センターなどの専門センターを設置し、高度で専門性の高い医療を提供している。

施設名：岐阜市民病院
開設：1941年（1931年に岐阜市診療所として開設）
病床数：565床（一般病床515床、精神病床50床）
病院管理者：岩間 亨
病院長：山田 誠
職員数：1010人（2025年4月1日現在）
所在地：岐阜市鹿島町7丁目1番地

課題と効果

課題1 RRS運用開始に向けて、効率的な体制整備が必要だった

効果 自動計算により最新スコアを常時確認でき、効率的なRRS運用が実現した

効果 スコア一覧は高スコア患者に限らず幅広い患者の状態把握に有効で、急変・重症化予防に寄与している

課題2 病棟看護師からの連絡がなければMETが状況を把握できず、情報共有が不足していた

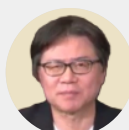
効果 スコア一覧画面を活用することで、METが病棟の状況をリアルタイムに把握できるようになった

効果 定期的な振り返り・検証会の実施により、MET内での情報共有と学びの場が確保され、病態変化への早期対応力向上につながっている

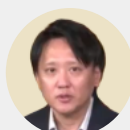
ソリューション

「HOPE LifeMark-RRS支援ソリューション」

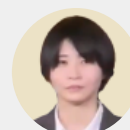
取材対象者



看護部副看護部長兼
医療情報部医療情報室
高階 利昭 様



METクリティカルケア
認定看護師
川久保 嘉文 様



MET救急看護
認定看護師
大橋 聖 様

導入の背景

高度急性期医療を担う岐阜市民病院様では、院内急変対応の強化を目的に、2021年度にRRS委員会、翌年度には対応チームであるMETを設置し、24時間対応の介入窓口を開設しました。急変予防と、急変前の兆候を早期に捉えて介入する体制づくりを進めてきましたが、RRS運用開始にあたっては大きな課題がありました。川久保看護師は次のように振り返ります。

「RRS支援ソリューション導入前は、急変時の対応は院内緊急コールが中心でした。RRSの運用を検討する中で、重症度を判断するEWS（早期警戒スコア：Early Warning Score）の算出が手作業になること、また、スコア算出後に病棟看護師から連絡がなければMETが状況を把握できないという課題がありました」

このように、スコアリング作業の負荷とMETへの情報伝達の遅れが、RRS運用開始の大きな障壁となっていました。こうした背景を踏まえ、2023年度に富士通JapanのHOPE LifeMark-RRS支援ソリューション（以下、RRS支援ソリューション）開発チームとの協働が始まりました。高階副看護部長は次のように語ります。

「富士通Japanに相談したところ、ちょうど開発に着手したタイミングだったこともあり、一緒に進めてみませんかと提案いただいたのがきっかけでした」

他社システムも比較検討しましたが、電子カルテとのシームレスな連携が可能で、同院の運用に適した機能を搭載できる点が決め手となり、RRS支援ソリューションを採用するに至りました。

システムの運用状況

同院では現在、重症部門病棟と小児科病棟を除く全病棟でRRS支援ソリューションを運用しています。早期警戒スコアは、7点以上を「高度リスク」、5～6点を「中等度リスク」、4点以下を「低度リスク」と分類し、リスクに応じた段階的な対応基準を設定しています。スコア

算出に必要なバイタルサインは、NFC連携機能を備えた測定器からベッドサイドで自動送信され、電子カルテの経過表へ直接入力される仕組みです。大橋聖看護師は次のように説明します。

「自動連携にした理由は、人的入力ミスの防止と業務効率化のためです。ただし、呼吸回数については呼吸の性状を観察する必要があるため、目視でカウントする運用としています」

RRS支援ソリューションのEWSスコア一覧画面は30分ごとに自動計算され、スコアリングに人の手を介する必要はありません。電子カルテとの連携もスムーズで、大橋看護師は次のように評価しています。

「スコア一覧画面の患者を右クリックするだけで、介入依頼テンプレート、時系列表示、カルテなどに即座にアクセスできます。一つの画面で情報把握と情報収集が完結するため、判断や対応がスムーズになり、業務全体の効率化に大きく寄与しています」

METは当番制で毎日スコア一覧画面を確認しながらラウンドを実施し、24時間体制の相談窓口により迅速な対応を可能にしています。大橋看護師は「要請が入った際にはすぐに現場へ向かう体制で動いています」と述べ、リアルタイムな情報共有が迅速な介入につながっていると強調します。

さらに同院では、RRS支援ソリューションと臨床意思決定支援システム「HOPE LifeMark NaviChart（以下、NaviChart）」との連携にも取り組んでいます。NaviChartは、電子カルテに登録したルールに基づき、蓄積された診療データから条件に合致した場合に医療従事者へ自動通知する仕組みです。この連携のメリットを、高階副看護部長は次のように説明します。

「スコアが7点以上の患者をNaviChartが自動検知し、METへ通知できるようになりました。RRS支援ソリューションの画面を常時確認しなくても迅速な対応が可能となり、医療安全の向上につながっています」

また、2025年度末を目標に、RRS支援ソリューションと「Healthcare Management Platform」のベッドコントロール支援機能との連携にも着手しています。ベッドコントロール画面でスコア一覧を確認できるようにすることで、一般病棟から重症部門への適切な転棟支援を実現するシステム構築を進めています。

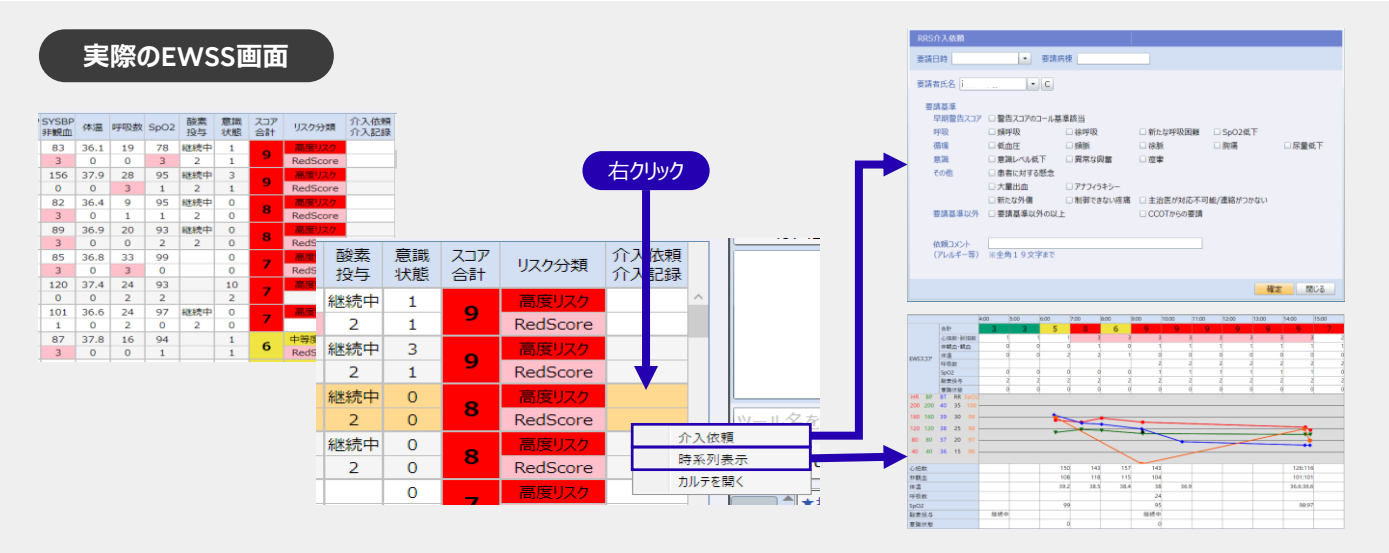


図1 RRS支援ソリューションスコア一覧画面

業務の効率化 最近の取り組み

ナビチャート機能の活用→スコアが7以上に变化した患者を検知しMETへ通知

実際の通知画面

通知リスト

未処理件数: 11 件

重要度	保留	ステータス	件名	受信日時	患者ID
中		未処理	RRS介入通知		
中		未処理	RRS介入通知		
中		未処理	RRS介入通知		
中		未処理	RRS介入通知		
中		未処理	RRS介入通知		
中		未処理	RRS介入通知		
中		未処理	RRS介入通知		
中		未処理	RRS介入通知		
中		未処理	RRS介入通知		
中		未処理	RRS介入通知		
中		未処理	RRS介入通知		
中		未処理	RRS介入通知		

通知詳細

ステータス: 未処理 重要度: 中

件名: RRS介入通知

受信日時:

患者:

ルール名: RRS連携 ルール版数: 1

重症スコアが7以上の患者を検知しました。
介入判断をお願いします。
判定日: 2026年●月●日
スコア: 10

メッセージが出る

図2 RRS支援ソリューションとNaviChartの連携によるMET対応のさらなる迅速化

システムに対する評価と今後

RRS支援ソリューションが重症化予防に貢献した事例として、腰椎後方除圧固定術後の肺梗塞を早期に検知できたケースがあります。術後7日目の朝、患者がベッドサイドで倒れているところを病棟看護師が発見。処置後、EWSが高度リスクに該当したため、METが直ちに病棟へ出動しました。主治医への報告と精査の結果、肺梗塞と診断され、速やかに重症部門へ入室。重症化を回避することができました。この症例について、川久保看護師は次のように述べています。

「RRS支援ソリューションの導入により、患者状態の変化をタイムリーに把握でき、METによる早期介入が可能となりました。急変の兆候を見逃すことなく、重症化予防に寄与できました」

こうした成果は運用データにも表れています。システム導入後の2024年度は、緊急コール件数33件に対し、RRS/MET要請件数が43件と上回りました。そのうち15件が重症化予防につながっており、RRS支援ソリューションによって患者の変化を事前に把握し、事後対応から事前

対応への転換が進んでいます。RRS支援ソリューションの導入効果について、大橋看護師は次のように評価しています。

「RRS支援ソリューションは高スコアの患者に限らず、幅広い患者に対して有効であり、急変や重症化の予防に寄与しています。定期的に振り返りや検証会を実施することで、MET内での情報共有と学びの場が確保され、スタッフの病態変化に対する早期対応力が向上しています」

また、高階副看護部長は次のように強調します。

「RRS支援ソリューションは日々の運用に欠かせない存在となっており、導入費用を上回る十分な投資対効果があると評価しています。今後のさらなる機能強化にも期待しています」

一方で、今後の課題として、介入依頼および介入記録の活用が十分でなく、情報の蓄積・分析が進んでいない点が挙げられています。また、対応がMET中心に偏っているため、病棟スタッフの積極的な関与が不足していることも課題です。今後は、介入記録の活用促進に向けた取り組みを強化するとともに、病棟スタッフが主体的に関わる体制構築を目指しています。

※職制・所属はインタビュー実施当時のものです

富士通Japan株式会社

富士通ヘルスケア関連のお問合せ

① <https://global.fujitsu/ja-jp/industries/healthcare-pharma/healthcare>